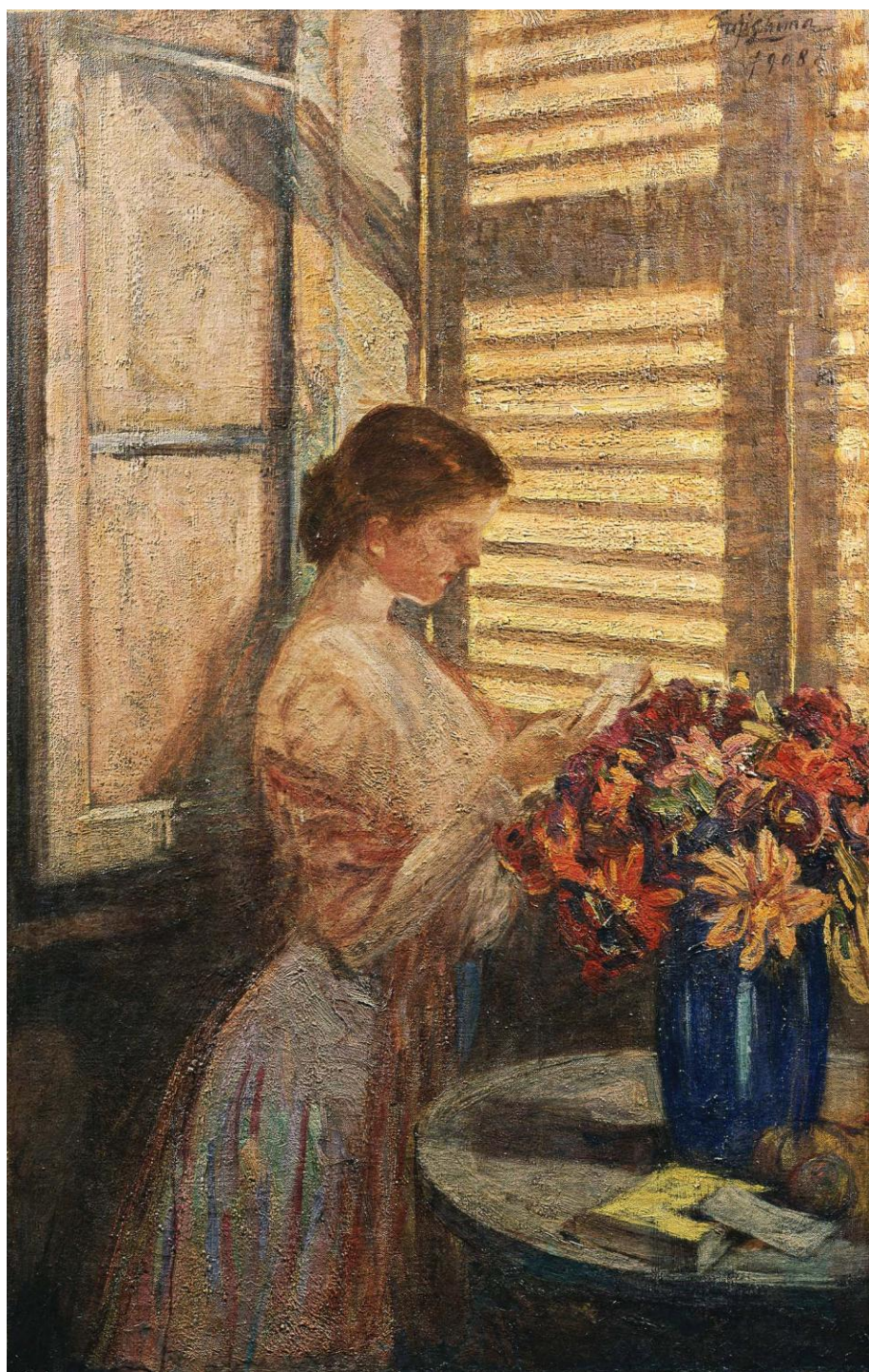


東京館開館25年記念 企画展
住友洋画 Collection Dig !
—このよの花とであう、よろこびの絵画(仮)—



2027年1月30日(土)ー3月22日(月・休)

《展覧会概要》

住友グループの礎を築いた第15代当主・住友吉左衛門友純（号：春翠、1864～1926）は、実業のかたわら芸術文化にも力をそそぎ、西洋絵画を積極的に収集しました。そのコレクションの始まりは、明治30年(1897)の欧米視察の際、パリで自ら選んで購入したクロード・モネの油彩画でした。

帰国後、春翠は、欧米の社会慈善事業に学んだ経験から、のちに関西美術院を開設することになる浅井忠やその後継者となる鹿子木孟郎らを積極的に支援しました。彼らを起点に、明治末に始まる文展で日本の「洋画」を切り拓いた青年画家たちの作品を積極的に購入していきます。それらの作品は、住友の洋館・須磨別邸などに飾られました。

その須磨別邸で幼少期を過ごした春翠の子息たちもまた、その生涯にわたり自らの感性に沿った絵画コレクションを形成したのも、自然な成り行きでした。その内のひとり、住友寛一(1896～1956)は、大正洋画壇の異才・岸田劉生と親しく交わり、劉生の画業の上でも重要となる作品を深く敬愛し保有し続けました。

また、住友友成(1909～93)は、アララギ派の歌人として知られ、春翠コレクションの後継となる20世紀洋画を収集しています。なかでも昭和戦前期の日本洋画を代表する画家たちのコレクションは自身の歌どころと共鳴したような素朴で力強い作風を示した作品が数多くみられます。また、戦中にあっても梅原龍三郎やその師ルノワールなどを愛蔵していたことは特筆に値しましょう。

本展は、住友春翠父子が継続してきた芸術支援とそれぞれの審美眼を深掘りして紹介します。

《基本情報》

展覧会名	泉屋博古館東京開館25年記念 企画展 住友洋画 Collection Dig！—このよの花とであう、よろこびの絵画（仮）
会 期	2027年1月30日（土）～3月22日（月・休）
開館時間	11:00～18:00 ※金曜日は19:00まで開館 ※入館は閉館の30分前まで
休 館 日	月曜日※3/22（月・休）は開館
入 館 料	一般1,200円(1,000円)、学生600円(500円)、18歳以下無料 ※学生・18歳以下のかたは証明書のご呈示が必要です ※20名様以上の団体は()内の割引料金 ※障がい者手帳等ご呈示の方はご本人および同伴者1名まで無料
会 場	泉屋博古館東京 〒106-0032 東京都港区六本木1-5-1 TEL:050-5541-8600(ハローダイヤル) https://sen-oku.or.jp/tokyo/
主 催	公益財団法人泉屋博古館
巡回予定	泉屋博古館（京都東山・鹿ヶ谷） 2027年5月29日（土）～7月19日（月・祝）

《展示構成（予定）》

セクションⅠ：住友春翠の洋画収集と支援事業（しあわせの館）

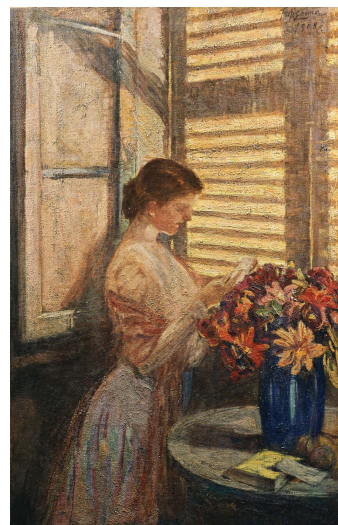
- 住友家15代・吉左衛門友純が明治30年（1897）の欧米巡察の旅で、自らの眼で選んだモネの油彩画《サン＝シメオン農場の道》と《モンソー公園》は、モネの実作として日本に将来された最初期の作品として記念碑的なもの。それは明治36年（1903）に完成した住友須磨別邸の壁を飾った。さらにコレクションを充実すべく春翠は、パリ留学中の洋画家・鹿子木孟郎（1874～1941）を支援し、彼に名画収集の仲介を依頼し、ジャン＝ポール・ローランスらの代表作が春翠のもとに送られた。また、帰国後の鹿子木は、恩師・浅井忠の作品を住友に斡旋している。春翠は、明治40年（1907）以降、大阪に美術館建設を計画し、同時期に始まった文展の出品作を積極的に購入し、それらを美術館に寄贈することを企図していた。そうした活動には、実業家で洋画家の支援者・今村繁三と文展出品作を共に定期的に購入することを約していたことも強く影響していた。



クロード・モネ《モンソー公園》1876年
泉屋博古館東京



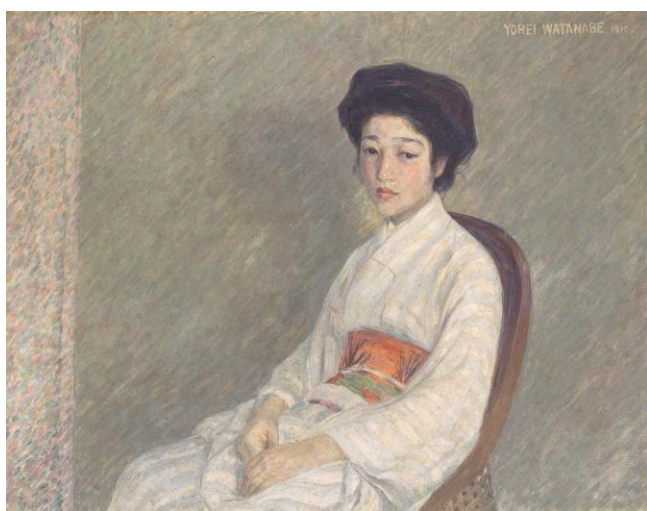
田村直一郎《朝陽荒川上流図》1905年
泉屋博古館東京



藤島武二《幸ある朝》明治41年（1908）
泉屋博古館東京



ソロモン＝ジョセフ・ソロモン《野の聖母》
19世紀末～20世紀初 泉屋博古館東京



渡辺與平《ネルのきもの》1910年
泉屋博古館東京

TOPIC

明治40年（1907）に住友春翠は、藤田伝三郎らとともに大阪に美術館を建設することを発起している。折しも、国家による公募展「文部省美術展覧会」（文展）がはじまり、美術館の建物だけでなく、中を飾る美術品も寄贈するために文展の出品作をこの時期集中的に購入している。大正3年（1914）までの間に、40点近い文展出品作を購入している。そうした芸術支援活動には、実業家で洋画家たちの支援者で知られていた今村繁三と文展出品作を共に定期的に購入することを約していたことも強く影響していた。また春翠の実兄・西園寺公望が同時期に首相を務めていたことも、間接的ながら国家の文化事業に対する支援活動と受け取ることができよう。

ここに掲出した3点の洋画作品は、春翠が購入したいづれも文展前期の出品作である。



重文 鹿子木孟郎《ノルマンディーの浜》
1907年 泉屋博古館東京

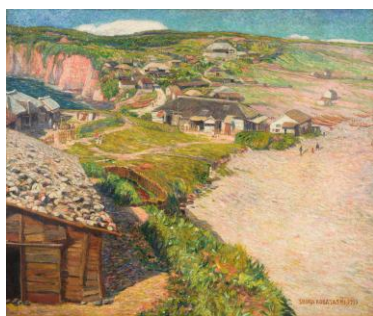
鹿子木孟郎の《ノルマンディーの浜》は、明治41年（1908）の第2回文展出品作だが、住友の支援による第2回目のパリ留学の成果としてフランス芸術家協会サロンに出品して入選した記念的作品。写生などに基礎付けられた人物描写や綿密な部分習作を積み上げた制作過程など、鹿子木がフランス・アカデミズムの巨匠ジャン・ポール・ローランスのもとで学び、日本に示そうとした大画面群像表現の明治後期の現存作例として、また文展創設期における留学画家の成果公表の例としても価値が高く、令和8年度国の重要文化財に指定された。

矢崎千代二の《草刈》と小林真二の《夏の浜辺》は、ともに大正2年の第7回文展の出品作。そのうち矢崎の《草刈》は、3等賞となった作品。白馬会で黒田清輝に学んだ外光派流の光と影の織り成す明るい樹林の下、草むらで休息をとる農夫一家の様子が描かれている。マネの《草上の昼食》の変奏と思しいが、思い思いのポーズをとる人々の視線は交わることがなく、群像構成上の試行の跡がうかがえる。一方の小林の《夏の浜辺》は、モネがよく描いたエトルタの海岸風景への憧憬を思わせ、描写は白色を効かせた、やはり外光派風の温かな表現でまとめている。

2作とも大阪の美術館構想に伴う寄贈予定だったと思われるが、明治後期に建設が頓挫したことによって、大阪銀行協会に寄贈され、長らく収蔵されていたが、近年、協会の移転により、住友ゆかりの泉屋博古館に寄贈された。



●初公開（現在修復中）
矢崎千代二《草刈》 1913年 泉屋博古館東京



●初公開
小林真二《夏の浜辺》 1913年 泉屋博古館東京

以上の3作品は、一方はフランス古典派の重厚な写実主義を、一方は外光派や印象派を受容した表現が顕著で、明治洋画壇の対照的な二つの大きな流れを感じ得るものだが、「自然の中で労働する民衆」という共通した主題に注目すると、春翠が相反する流派表現の強調よりも絵画作品から受け取ることができる「歎び」と「学び」の効用を重視していたことがうかがえる作例といえるだろう。

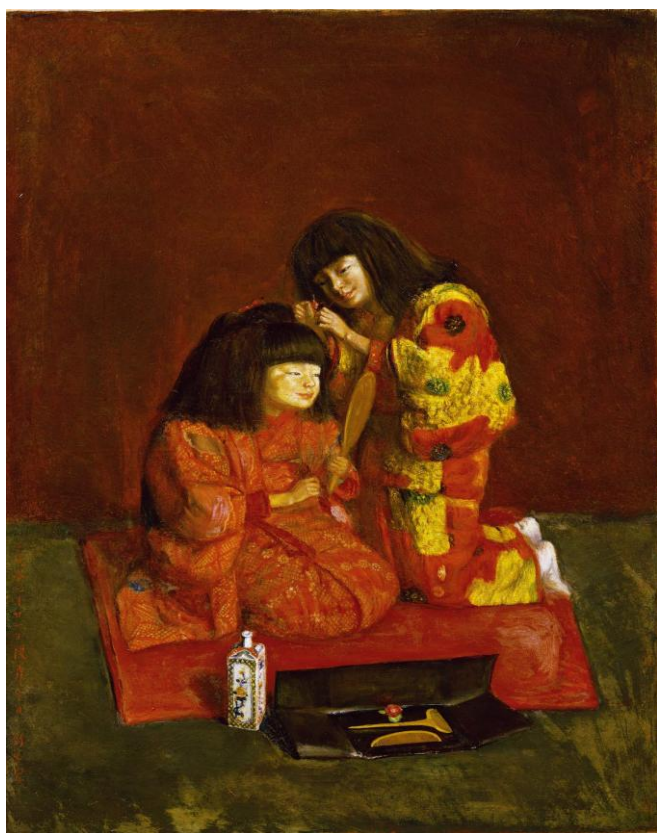
セクションⅡ：岸田劉生と住友寛一（交友の証し）

住友春翠の子息のひとり寛一(1896～1956)は、生来病気がちだったために、芸術に親しみ読書と思索の人生を歩んだ。彼が、東洋芸術に関心を深め、書画や篆刻、陶磁器の制作に打ち込むようになるのは大正中頃のこと。美術収集がはじまるのもこの頃のことである。洋画や文人画、仏画仏像、古筆や能面、そして中国絵画など、昭和戦前期まで精力的に蒐集した中で、とりわけ豊かな彩りを添えているのが、洋画家・岸田劉生(1891～1929)との交友である。

『劉生画集及芸術観』（1920年刊）を見た寛一は、その後、劉生の個展で底力のある劉生の絵に感心してまづは10号の《鵠沼風景》を一点求めた。これが縁となって劉生の鵠沼の家に呼ばれた寛一は、そこで麗子像をいくつか見せられ、その中から選んだのが《二人麗子図（童女飾髪図）》。中国宋元絵画によく描かれた「寒山拾得」を下敷きにしながら、「内なる美」への探究から生まれた独特の審美観「デロリの美」や「卑近美」を統合した劉生の代表作ともいうべき《二人麗子図》をはじめ、短いながらも生涯にわたる交流から質高い劉生の作品や遺作が住友のもとに届けられた。



岸田劉生《晩秋の霧日》1917年
泉屋博古館東京



岸田劉生《二人麗子図（童女飾髪図）》1922年
泉屋博古館東京



岸田劉生《自画像》1921年
泉屋博古館東京

セクションⅢ：住友友成と20世紀の洋画（歌ごろの共鳴）

住友春翠のもう一人の子息友成（1909～93）は、「泉幸吉」の名で斎藤茂吉の選を受けるアララギ派の歌人でもあった。

友成の洋画収集が本格化するのは、昭和9年（1934）に欧州視察に出かけた頃からのことで、1930年代から40年代前半に集中している。昭和戦前戦中にあたるこの時期は、第一次大戦後から第二次大戦前までにヨーロッパで学んだ洋画家たちが20世紀前期のパリ画壇を席捲したキュビズムやフォーヴィズムを盛んに移入した時代。とりわけ、フォーヴィズムに傾倒した画家達が集まった一九三〇年協会から発展した独立美術協会などは、実に多様な個性を成熟させる自由な場となっていた。主観を押し出して自然を解釈する彼らの作品に特徴的に現われたものは、東洋的な線質を生かしたり、主観的観照の実践としてのフォルムの単純化や様式化であり、それは伝統的な日本絵画にも通ずる要素でもあった。

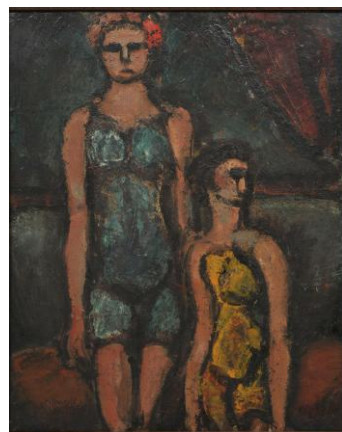
「日本的フォーヴィズム」と呼ばれた彼らが色にも形にも個性の持ち味を浸透させた主観的具象画は、身近な自然へのストレートな視線を映し出した歌を好んだ友成の愛するところでもあった。ここでは、実際にパリでフォーヴィズムの影響を受けた画家を中心に紹介するが、そのコレクションには友成の真率着実でおおどかな歌風に通じる嗜好が感じられる。



鍋井克之《奈良の月》1930年
泉屋博古館東京



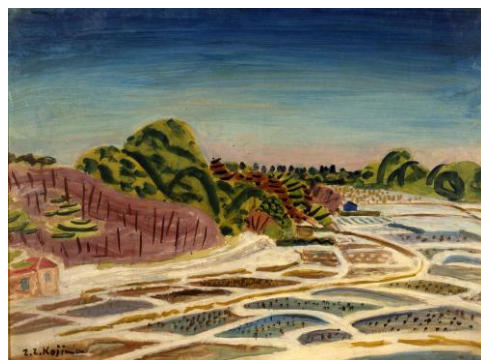
高間惣七《庭》1933年
泉屋博古館東京



ジョルジュ・ルオー《曲馬団の娘たち》
1924～25年 泉屋博古館東京



ルノワール《花》1910年代後半頃
泉屋博古館東京



児島善三郎《残雪》1937年
泉屋博古館東京



児島善三郎《残雪》1937年
泉屋博古館東京

《貸出可能画像・キャプション一覧》

画像のお申込み・ダウンロードは、
オンラインリリース（ARTPR）をご利用ください▶▶▶



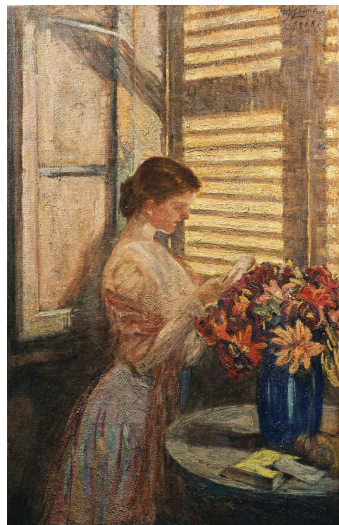
クロード・モネ《モンソー公園》1876年
泉屋博古館東京



田村直一郎《朝陽荒川上流図》1905年
泉屋博古館東京



ソロモン=ジョセフ・ソロモン《野の聖母》
19世紀末～20世紀初 泉屋博古館東京



藤島武二《幸ある朝》1908
泉屋博古館東京



重文 鹿子木孟郎 《ノルマンディーの浜》
1907年 泉屋博古館東京



岸田劉生《晩秋の霧日》1917年
泉屋博古館東京



岸田劉生《二人麗子図（童女飾髪図）》
1922年
泉屋博古館東京



ルノワール《花》1910年代後半頃
泉屋博古館東京



児島善三郎《残雪》1937年
泉屋博古館東京



熊岡美彦《ミモザ》1929年
泉屋博古館東京

《お問い合わせ先》 泉屋博古館東京 広報担当：橋本旦子

展覧会担当：野地耕一郎（泉屋博古館東京館長）、椎野晃史（泉屋博古館東京主任学芸員）

TEL: 03-3584-8136 FAX: 03-3584-8137 E-mail: pr-tokyo@sen-oku.or.jp



泉屋博古館東京

SEN-OKU HAKUKOKAN MUSEUM TOKYO